

更級日記の東山滞在記事をめぐる

安藤重和

一
更級日記によれば、作者は、萬壽二年「四月つごもりがた」から同年八月下旬頃までの間、「さるべきゆゑありて、東山なる所へうつろ」っているが、その時に作者と和歌の贈答をした「しづくに濁る人」に関して、稻賀敬二氏は、

「零に濁る人」は男であり、彼女の旧知の人であり、それは彼女の最初の恋人であり、

と推定され、更にそれは「亡姉の夫」ではないかとする説を發表された。⁽²⁾鈴木紀子氏は稻賀説を承けて、作者は東山滞在中に姉の夫の子を出産し、その子が不幸にも間もなく死去し、十月末に再び東山へ行ったのは、その亡兄の四十九日の法要の爲かと推定を進められ、石川徹氏は、稻賀・鈴木両説を肯定されつつ、「恐らく、孝標女が三十三歳の年まで結婚できなかったのは、この姉の夫との関係が噂となって広まったのが原因であつたらう」という見解を表明された。⁽⁴⁾これら一連の推定は実に興味深いもので注目すべきものとは思ふが、その推定の基礎とな

る稻賀説には重要な箇所であり、氏自身「このような論証ぬきの論理の飛躍」と言われざるを得ないような論証の不確かな点が散見されるので、今一度更級日記の文章を全ての先入見を排して読み直して見る必要があるように思う。少なくとも、「よはのねざめ」の作者を孝標女とする先入見を持ち込んだの読みは慎しみたいと思う。

二

先ず、「東山なる所」とは如何なる場所であつたのかの検討から始めよう。東山再訪の有様を語る次の記事に注目しよう。

十月つごもりがたに、あからさまに來て見れば、こ暗う繁れりし木の葉ども残りなく散り乱れて、いみじくあはれげに見えわたりて、心ちよげにさゝらぎ流れし水も木の葉に埋もれて、あとばかり見ゆ。

水さへぞすみ絶えにける木の葉ちる嵐の山の心ぼそさに

そこなる尼に、「春まで命あらばかならずこむ。花ざかり

はまづ告げよ」などいひて帰りにしを、(略)

「そこなる尼」という語に氣をつけよう。「そこ」とは、「あからさまに来て見」た所であり、「水さへぞすみ(澄み・住み)絶えにける——即ち、以前は作者も住んでいた」所であり、

「春まで命あらばかならず来む」と思っている所であって、つまりは東山の移住先であった所を指している事は文脈上明らかであろうと思う。「そこ」に「尼」がいて、「水さへぞすみ絶えにける」後もその場所に住んでいるらしい点から見て、この「尼」は単なる客ではなく、その場所に常住している人であることが明らかであろう。故に、堀内秀晃氏が「『東山なる所』はこの尼の庵室でもあったか」と指摘され、秋山虔氏が「あるいは東山の移転先というのが実はこの尼の庵だったものか」と指摘されるのは、鋭い御指摘と言わざるを得ない。

さて、東山のこの尼の許に寄宿していたのは作者だけではなかったらしい。東山滞在中の次の記事を見よう。

このつごもりの日、谷の方なる木の上に、郭公、かしがましく鳴いたり。

都には待つらむ物を郭公けふ日ねもずに鳴きくらすかななどのみ、ながめつゝ。

もろともにある人、「たゞいま、京にも聞きたらむ人あらむや。かくてながむらむと思ひおこする人あらむや」などいひて、

山深く誰か思ひはおこすべき月見る人は多からめども

といへば、

ふかき夜に月見る折は知らぬどもまづ山里ぞ思ひやらるゝ

この部分、文章表現上から見ると、全て「このつごもりの日」の出来事を語っているように思われるが、内容的に考えると、「月見る人は多からめども」という文句を有する歌が月の出ないはずの「つごもりの日」の詠となって矛盾するので、従来不審とされて来た部分である。その点をまづ検討してみたい。考えて見ると、不審な点はまだある。「都には待つらむ物を」と歌い上げている作者に、その同じ日に、「もろともにある人」が、「たゞいま、京にも(郭公ヲ)聞きたらむ人あらむや」と問いかけていると言うのも奇妙ではないか。この問いかけは、過して、郭公が山から京の町へおりて行った段階でのものと考える方が、自然であろう。こう考えて見ると、右の引用部分のうち、「もろともにある人」以下の部分は、少なくとも内容的に見る限り、郭公が京の町へおりて行った頃で且つ「月見る人」が「多」い頃、即ち五月中旬の出来事を語っていると解すべきであろう。右の引用文中、「ながめつゝ」で文を終止させ、「もろともにある人」以下を改行した所以である。鈴木紀子氏は、東山滞在中、五月と六月の二箇月は記事が空白になっているとされ、この「二ヶ月の空白」を重視されるのであるが、五月の出来事には言及していると考えてよいのではなからうか。

さて、私が今注目したいのは、「もろともにある人」という部分である。この部分に関し、『全釈更級日記』では、

しばらく作者の家にいっしょに住んでいる人か、友達かであらう。会話が同格になっている所を見ると侍女ではあるまい。

と注記されている。⁽⁸⁾「作者の家に」とある部分については、作者の移住先を前述の如く「尼」の許と考えるので従えないが、その他については従うべき御説であると思う。更級日記では作者が侍女と会話したり、歌の贈答をしたりする描写はない事を考えると、「もろともにある人」とは、「尼の所で一緒に暮らしている女性」と解してよいと思う。それは、作者が実際に侍女を伴っていたかどうかとは別次元の問題である。又、「もろともにある人」が、「山深く誰か思ひはおこすべき」と孤絶感に苛まれているのを、作者が「ふかき夜に月見る折は(略)まづ山里ぞ思ひやらるゝ」と慰めているところを見ると、作者よりやや若いか同年輩くらい女性の女性なのであらう。会話が同格になっている点や地の文で彼女に対する敬語が用いられていない点から見ても、身分的にも年令的にも作者とあまり大きな差のない女性と考えられる。

この「もろともにある人」も、「十月つごもりがた」までには尼の許を去ってしまったことは、「水さへぞすみ絶えにける」の和歌によって明らかであるので、常住者ではなく寄宿者であることが知られる。

要するに、この「尼」の許には、作者以外にも寄宿者がいたわけであり、この点に注意しておきたい。

三

次に東山滞在中の「靈山詣で」の項の検討に入る。

靈山ちかき所なれば、詣でてをがみ奉るに、いと苦しければ、山寺なる石井に寄りて手にむすびつゝ飲みて、「この水の飽かずおぼゆるかな」といふ人のあるに、

奥山の石間の水をむすびあげてあかぬめものとは今のみやしる

といひたれば、水飲む人、

山の井のしづくに濁る水よりもこはなほあかぬ心地こそすれ

「奥山の」の歌と「山の井の」の歌の贈答の最後には、古今和歌集巻第八離別歌に収められている次の歌がふまえられていることは諸注釈書の指摘するところである。

志賀の山ごえにて、石井のもとにて物いひける人の別
れけるをりによめる
つらゆき

むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人に別れぬる
かな⁽⁹⁾

実はこの歌は、拾遺和歌集や貫之集にも歌句や詞書等に小異を含んだ形で載せられている。

○拾遺和歌集第十九 雑恋

しがの山ごえにて女の山の井にてあらひむすびてのむ
を見て 　　つらゆき

むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人に別れぬる
かな(10)

○貫之集第九

しかの山こえにてやまの井にをんなの手あらひて水を
むすひてのむを見てよみてやる

結ぶてのしづくにこるやまの井のあかても君にわかぬ
る哉(11)

拾遺和歌集と貫之集は詞書が類似して共に「女」に言及し、「結ぶ手の」の歌を男女間の恋の歌として位置付けようとする気味があるが、一方、古今和歌集の方は、詞書においても相手を「女」とは限定せず「物いひける人」という一般的表現にとどめ、部立ての上でも「離別歌」に入れて、当該歌を「恋の歌」というよりは「離別の歌」として扱う姿勢が顕著である。この点に関連して、鈴木紀子氏は、

拾遺集の詞書によれば、山の井で女が手で水をすくって飲んでる様子を見た男の歌となっているが、これは正に更級日記の作者が「いと苦しければ、山寺なる石井に寄りて、手にむすびつゝ飲みて」という状況と酷似するもので、詞書から見る限り、この歌（「山ノ井ノノ歌—安藤注」）は古今集によったというより、拾遺集によって作られたと考える方がより自然であろう。そして、同行の人は男である可

能性が強いといえる。

と述べておられるが如何であろう。と言うのは、鈴木氏が右において引用された日記本文に見える「石井」という語は、古今和歌集詞書のみに見える表現であるからである。このあたり、拾遺和歌集の詞書によっているというのであれば何故「山の井」という語を用いていないのであろうか。たとえ、靈山寺の「井」が事実として石井であったとしても、それが山中の井であることに変わりはなく、「山の井」と表現することは十分に可能であったはずである。又、更級日記の「手にむすびつゝ飲みて」という表現は、「むすぶ手の云々」という和歌の表現に引き寄せられたものと考えれば事足りると思われる、敢えて拾遺和歌集詞書の影響を考える必要はあるまい。なお、古今和歌集詞書の「石井」という表現の影響を受けていると思われる箇所は、右に述べた箇所以外に、作者の詠歌たる「奥山の」の歌の中の「石間の水」という箇所を挙げてよいであろう。

又、古今和歌集詞書に「石井のもとにて物いひける」とある部分が、更級日記において、「山寺なる石井」のもとで作者と「水飲む人」が和歌を贈答している場面と類似している点も見逃してはなるまい。

どうやら、従来の注釈書の説の如く、更級日記作者は、古今和歌集を通して「むすぶ手の」の歌を享受していると見て大過なさそうである。ということは、男女間の「恋」の歌というよりは「離別」の歌としてこの歌が受け取られている可能性が強

いことになり、「水飲む人」即ち「しづくに濁る人」を男性と決めることもできなくなろう。

四

さて、「石井」の水をめぐる和歌の贈答がなされた後の部分に注目しよう。

帰りて、夕日けざやかにさしたるに、宮この方も残りなく見やらるゝに、このしづくに濁る人は、京に帰るとて、心苦しげに思ひて、またつとめて、

山の端に入日のかげは入りはてゝ心ぼそくぞながめやられし

「帰りて」とは、靈山から東山の寄宿先へ帰りての意味であるが、「帰りて」の主語は作者だけではなく、「しづくに濁る人」も主語に含まれていることに注意しよう。つまり、作者も「しづくに濁る人」も共に東山の寄宿先へ「帰りて」、その後「しづくに濁る人は京に帰る」わけである。ということとは、この「しづくに濁る人」も、靈山寺から東山の寄宿先へ移動するという行為を、作者と同様に「帰りて」という語で表現し得る人であったということ、言い換えれば、「しづくに濁る人」も東山の尼の許に寄宿している一人であったということになる。作者が「しづくに濁る人」を寄宿先へ誘ったというような表現が全く見られなくて、さもそこへ「帰る」のが当然という表現がなされているのはそのような事情による。なるほど、「し

づくに濁る人」が「京に帰るとて、心苦しげに思ひて」別れを惜しんだだけではなく、更に、翌朝早く「山路を深く」和歌を詠み送って来るといふ念入りの行動に出ているのは、余程強い親近感が作者との間に生まれていることを思わせるが、それは必ずしも男女間でなくとも発生し得るものであろう。この「しづくに濁る人」はこの日京に帰っており、前述の「もろともにある人」と別人であることは言うまでもない。

次に、作者が、「夕日けざやかにさしたるに、宮この方も残りなく見やらるゝに」と述べている点にも注意しよう。これは、自分の居所を、京から断絶された場所ととらえているのではなく、「宮この方」を「残りなく見やらるる」場所として京との連続性において認識していることを示している。それに引き換え、「しづくに濁る人」は「京に帰るとて、心苦しげに思ひて」とあり、東山と京を断絶的に考えていることが知られる。京に帰ることが心苦しいのは、東山と京を別々の生活空間ととらえ作者を京とは別の生活空間に残置することを気に病むからである。この姿勢は和歌にも一貫している。「山の端に入日のかげ」が「入りはてて」しまえば、時期が「四月つごもりがた」である以上月も出ず、闇夜となって京と東山は相互に見ることのできない断絶した世界となる。昼間ならば、そうは言えないのだけれど、「しづくに濁る人」はそういう日没後の時間帯に着目するのである。そして、作者の居住する東山と自分が帰って来た京とが断絶した状況にあることを自覚し、必然的に「心細く」

感ずることになる。その「心細さ」をどうにかしようとする作者のいる東山を自然「ながめやられ」るのであるが、しかし、闇夜に東山が見えるはずもなく「心細い」思いを確認するだけに終るはずである。つまり、この和歌の趣旨は作者と別れた後の自分の「心細さ」を作者に訴えることにある。自分の「心細さ」を何故作者に訴えるのかといえば、作者を頼りにしているからであろう。一体、これが男性の作った歌と言えるであろうか。女性である作者を頼りにして自身の「心細さ」を訴えているこの和歌は女性の詠としてこそ理解しやすいのではないか。この点と、この人が尼の許に寄宿していたらしいこと（前述）とを考えあわせれば、この「しづくに濁る人」が男性でなく女性であることは動かないと思う。作者を頼りにしている点を見るとこの女性は作者より年下であるかも知れないが、この女性の行動を描写するのに敬語法を用いていないことや和歌の応酬が対等になされていることから見て、ほぼ作者と同年輩の女性と見てよいかと思う。

更に注意すべきは、この「しづくに濁る人」が「京に帰る」時、作者の側から別れを惜しんでいる気配が皆無であることである。別れを惜しんでいるのは一方的に「しづくに濁る人」の側である。「『夕日けざやかにさしたる』ので『宮この方も残りなく見やらるゝ』のに『このしづくに濁る人は、京に帰るとて、心苦しげに思ひて』」と、そう作者は言っている。「しづくに濁る人は」の「は」に注意すべきである。この「しづくに

濁る人」が本当に作者の初恋の人であるのなら、作者が別れを惜しまないはずはないように思う。

「しづくに濁る人」は作者の初恋の人でも亡姉の夫でもなく、東山の尼の許に寄宿していた一女性と考えるべきであろうと思う。その女性が靈山詣での行われた当日に京に帰っている事情はよくわからないが、或いは帰京に先立って思い出に作者らと一緒に靈山詣でをしたかったのかも知れない。ともかく靈山詣でを済ませてから作者らと別れることになるというところは靈山詣でをしている段階でわかっていたであろうから、「しづくに濁る人」が詠んだ「山の井のしづくに濁る水よりもこはなはあかぬ心地こそすれ」の下の句の部分には、山の井の水の味の比較のみでなく、離別し難さの比較の意も含まれていると考えてよいようである。つまり、あなたと別れて京へ帰る私の方があの貫之よりもっと別れづらい思いでいます、の意である。とすれば、靈山詣では「お別れ遠足」的な意味もあつたことになろう。

五

それにしても、作者は何の為に四ヶ月以上も東山の尼の許に身を寄せていたのであろうか。作者はそれを「さるべきゆゑありて」としか示さないが、一度考えてみたと思う。

作者は東山滞在の時十八歳であった。同じく寄宿していた「しづくに濁る人」や「もろともにある人」も作者と大体同年

輩かと思われる人である。これらの人々が同一期間に一斉に寄宿生活をしたわけでないことは、「しづくに濁る人」は四月下旬に帰京しているという点から見て明らかであるので、各人都合のよい時期に寄宿生活をしたのであろうが、今、寄宿している人々が十八歳の作者と同一世代らしいことに注目したい。というのは、萬壽三年作者十九歳の時つまり東山滞在の翌年の記事に次のように書かれているからである。

かやうに、そこはかなきことを思ひつゞくるを役にて、物語をわづかにしても、はかばかしく、人のやうならむとも念ぜられず。このころの世の人は十七・八よりこそ経よみ、おこなひもすれ、さること思ひかけられず、からうじて思ひよることは（物語世界へノ没入ノミデアル）

つまり、「十七・八歳」というのは「経文読誦」や「仏道修行」を開始する年齢なのである。なお、ここに「さること思ひかけられず」ともあるのを文字通りに受け取って十九歳の段階に至っても、作者だけはそういう行為と完全に無縁であったなどと考えてしまつてはなるまい。何故なら、「はかばかしく、人のやうならむとも念ぜられず」という消極的な状態であったにせよ、たとえ「わづか」な回数であったにせよ、「物語」を作者がしていることは、右の引用文により、確実だからである。現実には「物語」をして、「経文読誦」も「仏道修業」も全くしないというのはむしろ考えにくい。それくらいなら、「物語」自体を拒否するはずであらう。故に、「さること思ひかけられず」の

意味は、「自発的積極的にはそういうことを思いかけることができなかつた」という程度の意味に解すべきであらうと思う。結局、右の引用部分全体の述べるところは、消極的な形においてしか仏教とかかわりを持ち得なかつた、という事実であらう。

この作者が、「経文読誦」や「仏道修業」を「このころの世の人」一般が開始する年齢と考えられていた十八歳という年齢において、赴いた先が「尼」の許であつたということは、その目的をおのづから推察させるではないか。恐らく、「経文読誦」や「仏道修業」に関する世間並みの「手ほどき」を受ける為であつたと思う。大体同年輩と思われる他の寄宿者もほぼ同目的であつたのであろう。勿論、物語世界に埋没して仏教と積極的に関わるこののできなかつた当時の作者が、自発的に尼の許へ赴いたとは思わない。多分、親によって尼の許へ送り込まれたというのが真相であらう。「親」と行つても特に母親の方が仏教に深い関心を有していたことは、例えば、長元六年の次のような記事からも知られよう。

母一尺の鏡を鑄させて、えゐてまゐらぬかはりにとて、僧を出だし立てて初瀬に詣でさすめり。「三日さぶらひて。

この人のあべからむさま、夢に見せ給へ」などいひて、詣でさするなめり。そのほどは精進せさす。

作者が東山の尼の許に送り込まれたのはこの「母」の意向が強く働いてのことであつたのであろう。しかし、文学的興味が極めて旺盛で仏教には消極的にしか関わり得なかつた作者は、東

山滞在中の記事を和歌の詠作及び贈答関係の記事で埋め尽くしてしまい、尼から仏教関係の手ほどきをどのように受けたかという部分は一切省いてしまったものと思われる。

結

以上、作者は東山で尼の許に寄宿していたであろうこと、そこには作者以外にも寄宿する女性があったらしいこと、「しづくに濁る人」は男性ではなく尼の許に寄宿していた女性の一人であるらしいこと、作者の東山滞在の目的は尼から世間並みに仏道修業等の手ほどきを受けることであつたらしいこと、などを中心に考えを述べてみた。推論の過程に思わぬ誤りがあつたのではないかと恐れる。諸賢の御教導を乞うこと切である。

注(1) 西下経一氏校注 岩波文庫『更級日記』(岩波書店 昭和38・11改版)の本文に拠る。

(2) 稲賀敬二氏「孝標女の初恋の人は『雫に濁る人』か」

(国語と国文学 昭43・11) 参照

(3) 鈴木紀子氏「更級日記——東山滞在の意味するもの——」

(『松村博司先生古稀記念国語国文学論集』 笠間書院 昭54・11) 参照

(4) 石川徹氏編著『校注夜半の寝覚』(武蔵野書院 昭56・

11)「解題」14頁

(5) 堀内秀晃氏校注 校注古典叢書『更級日記』(明治書院

昭52・3)40頁

(6) 秋山虔氏校注 新潮日本古典集成『更級日記』(新潮社

昭57・7)54頁

(7) 注(3)論文参照

(8) 鈴木知太郎・小久保崇明両氏著 笠間選書『全釈更級日

記』(笠間書院 昭53・12)172頁

(9) 佐伯梅友氏校注 岩波文庫『古今和歌集』(岩波書店

昭56・1)の本文に拠る。

(10) 『新編国歌大観』(角川書店 昭58・2)の本文に拠る

(11) 和歌史研究会編『私家集大成 中古I』(明治書院 昭

48・11)所収「貫之集」(正保版本「歌仙歌集」)の

本文に拠る。

(12) 注(3)論文参照